みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Collecting of Ethnological Artifacts from Papua New Guinea

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 和芳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004665

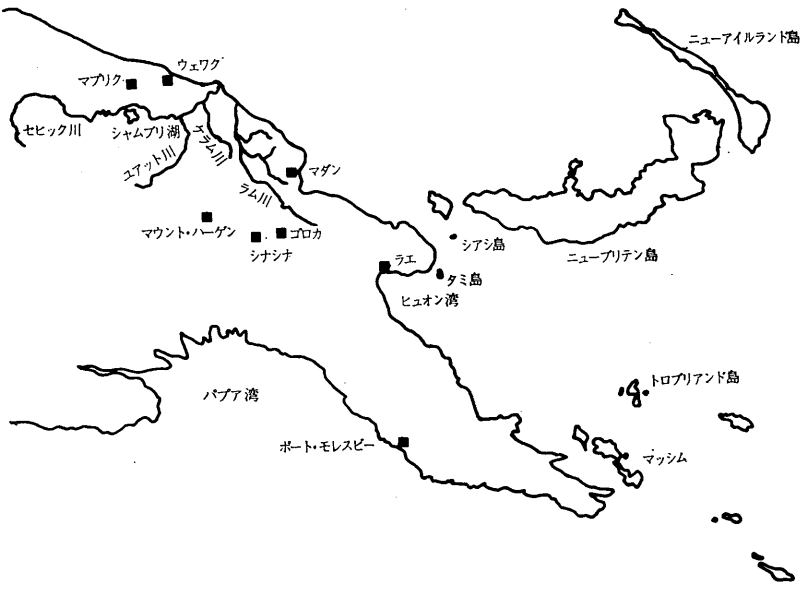
ニューギニアの収集品から

中　山　和　芳*

1974年8月末から10月中旬までの約50日間，私はパプア・ニューギニアにおいて国立民族学博物館の展示のための資料の収集をおこなった。これは博物館が創設されてはじめての海外収集活動であった。

たまたまニューギニアに滞在中だった金沢大学の畑中幸子氏に同行させていただいて，ポート・モレスビーをふりだしに，ラエ―チンブー―マウント・ハーゲン―マダン―ポート・モレスビーと，11日間でニューギニアを一巡した。この旅行中，畑中氏から資料収集について，いろいろ貴重な助言をいただいた。ポート・モレスビーに戻って，帰国する畑中氏と別れた後，今度は入れかわりに日本から到着した石毛直道氏と一緒に，前のコースをもう一度回り，さらにウェワクまで足をのばして，各地で資料の購入をおこなった[1)]。

今回は，収集品の多くを，ポート・モレスビー，ラエ，ウェワクなどの都市の美術商から購入した。もちろん，このような収集方法はかならずしも望ましいも



* 国立民族学博物館第1研究部

のではないが，時間が限られていたので止むをえなかった（したがって，こうした方法で購入した資料に関するデータは，美術商店主から得たものである）。

今回の収集資料は全部で263点。現在，資料は万国博記念公園内の博物館の仮収蔵庫におさめられている。

以下では収集した資料の中から主なものを，地域別に分けて紹介していくことにする（括弧内の数字は国立民族学博物館の標本番号である）。

＊　　＊　　＊

セピック　オセアニア芸術を語る際に，セピックSepikという名を落すことはできない。形態の大胆さやその多様性で，セピック地域はニューギニアのもっとも重要な造形文化の中心である。セピック川流域には大きな儀礼用家屋が建っている。ここは成年男子が宿泊する場所ともなるが，その内部には祖先霊や精霊をあらわす彫像，仮面，装飾板をはじめ，多くの神聖な祭祀物が置かれている。女性や子供がここに近づくことは，従来は厳しく禁じられていたといわれている。イニシエーションやその他の儀礼では，これらの精霊の声がブルローラーや神聖な横笛（ユアット川 Yuat R. 流域，No. 1283）の音によってあらわされる［ALLEN, 1967：pp. 58-59］。

セピック川流域の美術は，細長く表現された顔や長くのびた鼻など，共通した造形的な要素をもっているが，隣接地域の影響を受けて，川の流域に点在するそれぞれの村は，すこしずつ異ったスタイルの作品をつくっている。というのは，隣接する部族同士は昔から敵対関係にあり，絶え間なく争いや首狩が行われてきたにもかかわらず，材料だけでなく，祭礼用の彫像や仮面，儀礼や歌の交換がおこなわれてきたからである［GUIART, 1968：p. 24］。

セピック下流とラム川 Ramu R. 流域の仮面や彫像は，その鼻が，異常に長くとがっていて，顔全体や体にまで達しているのが，もっとも顕著な特徴である。鳥の嘴にそれが似ているところから，ニューギニア美術の研究者の間では一般に≪beak style≫と呼ばれている。この特徴は，象の形の頭をもつインドの神，Ganeshaに由来するものであるという説もある［NEWTON, 1972：p. 30］。その他にも，円錐形に髪を束ねたような大きい

1）私にとって，今度がはじめての海外旅行であり，いろいろとまごつくことが多かったが，多くの方々の御協力によって，無事に仕事を終えることができた。ポート・モレスビー駐在の国連インフォメーション・センター所長の小田信昭氏，エア・ニウギニ（Air Niugini）のユキコ・ホワイト夫人とフデコ・リーキー夫人，Papua and New Guinea Museum の Dr. Smidt と Dr. Egloff，チンブー・シナシナの Koge Catholic Mission の Father Ommerbourne, Father Joeger, Sister Elizabeth, Sister Rosemary, Sister Kierain, Mt. Hagen Catholic Mission の Bishop Bernarding，いろいろと御世話になった以上の方々に，深く感謝いたします。また，ポート・モレスビーとマダンで宿泊施設を提供してくださった日本映像記録センター（NAV）とジャント株式会社（JANT PTY. LTD.）には厚くお礼申しあげます。そして，ニューギニア現地において，私に学問的イニシエーションを授けて下さった畑中幸子氏には，特にお礼申しあげます。

なお，資料の撮影にあたっては，国立民族学博物館情報管理施設の宇治谷恵氏の御協力を得ました。

頭，長い先細の顎をもつ顔，すわったりかがんでいるようなまがった短い足といった特徴もあり，全体が鳥のような印象を与える［GUIART, 1968：p. 8］。ケラム川 Keram R. の精霊の像（No.1335）は，この特徴をよく示している。

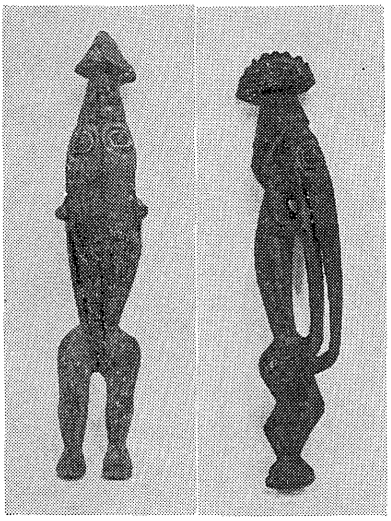


写真1　精霊の像（No.1335）
ケラム川流域。高さ30cm。

ミドル・セピックはセピック美術の中心である。祖先や精霊をあらわす仮面や彫像ばかりでなく，日常用いられる品々にも，人間や動物の彫刻や彩色が施されている。儀礼用家屋の切妻や内部には，様々な仮面や彫像が飾られている。長い鼻稜，眉毛と口の間の隈取り，目の強調は，この地域にしばしば見られる特徴である。文様として円や曲線が多用される（No. 1260, 1268, 1344, 1349, 1355）。

この儀礼用家屋に置かれている重要なものの一つに，一般に≪orator's stool≫とか≪debating stool≫と呼ばれているものがある。椅子の背に人体が彫刻された様式になっているが，これは座るためのものではない。儀礼的な演説を行うときに，葉の束で座席の部分をたたいて，話を強調するために用いられるものである［STEWART, 1972］（No. 1489。ただし今回の収集品では脚の部分が欠けている）。

食料を鼠などからの被害から守るために使用される鉤（food hook, suspension hook）は，ミドル・セピックでとくに発達している（No. 1269, 1484）。鉤は儀礼用家屋の天井からぶら下げ，下部の左右に張り出した部分に個人の所有物の入った籠や編袋などを吊す。鉤には祖先像を彫刻し彩色を施す。二股のものや，四股のものなど，いろいろな形式のものがある［STEWART, 1972］。

ミドル・セピックのシャムブリ湖 Cha-

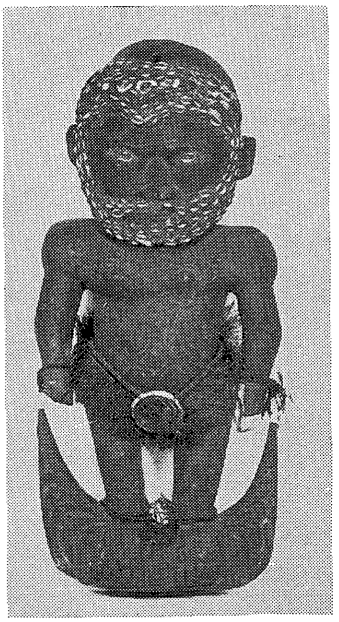


写真2　鉤（No.1269）
ミドル・セピック，シャムブリ村。高さ55cm。

mbri L. 一帯は，セピック地域の土器製造の中心地の一つである。彫刻や仮面の製作は男の仕事であるが，土器作りは女の仕事である。メラネシアでは土器を作る時に，ろくろは用いずに，手づくね法や巻き上げなどの方法によって形づくる。手や貝，あるいは板を使って形を整え，天火で乾した後に，薪の中に置いて焼きあげる。ミドル・セピックの土器は，用途によって，貯蔵用，調理用，炉，儀礼用家屋の装飾のための仮面や像などに分けられるが，どれにも彩色，切込みなどの装飾が施されている［STEWART, 1972］。

写真3　人面付土器（No.1274）
ミドル・セピック，シャムブリ村。高さ30cm。

球形の壺は食料のサゴを貯蔵するために用いられる。大きな壺にはその頸部に様式化された人間の顔がついていて，その鼻は顔を表わす二つの円の接点から隆起している（No. 1274, 1275, 1350, 1481, 1492, 1495, 1513）。円錐形の土器は調理用や食器として用いられる。これには螺旋形や渦巻模様の曲線が凹刻される（No. 1359, 1360, 1500, 1501, 1506）。

セピック川の北，プリンス・アレクサンダー山脈 Prince Alexander Mts. のマプリク Maprik 山地一帯には，とくに壮大な儀礼用家屋で有名なアベラム族 Abelam やアラペシュ族 Arapesh が住んでいる。儀礼用家屋の大きいものは高さが80フィートにまで達するものがあるという。建物の正面の椰子皮の三角形の壁面には，祖先霊が赤，オレンジ，黄，黒，白のあざやかな色彩で描かれている。切妻の下の方には楣（ドアなどの上部の横材）に木製の顔の帯状装飾が用いられている（No. 1488, 1496）。

アベラム族の儀礼用家屋には，原地語で ≪ŋgwalndu≫ と呼ばれる祖先像が置かれている（No. 1366）。≪ŋgwalndu≫ は，ヤム芋や豚の豊穣，人間の幸福と出生をつかさどると考えられている。模様として三角形のモチーフが顕著であり，頭上にのっている鳥はトーテム的意味をもつといわれている。両足の間に豚がいて，ファロスを見上げている。これは ≪ŋgwalndu≫ の精液が豚の発育と関係があると観念されているためである［FORGE, 1971：p. 309］。

この地域の主食はヤム芋とタロ芋だが，とくにヤム芋は儀礼的価値をもち，しばしば人間と同じように扱われることがある。儀礼的な収穫物の展示がおこなわれる時には，細く引きさいた籐を編んでつくった仮面，ヤム・マスクでヤム芋を飾る。突き出した鼻梁で隔てられた一対の丸い目をもつこの仮面は，全体が鳥の頭をあらわしたような感じを与える（No. 1296）。メラネシアでは，農耕は主として女性の手でおこなわれるが，アベ

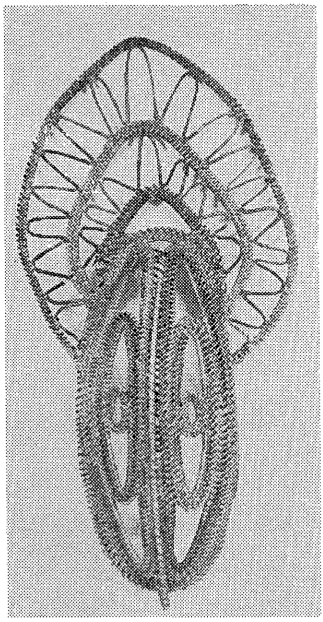


写真4　ヤム・マスク (No.1296)
マプリク，アベラム族。高さ65cm。

ラム族では，ヤム芋の植え付けや収穫は男達がおこない，長いヤム芋（12フィートという記録がある）をつくることが，権威を獲得する方法の一つとなっている［FORGE, 1971：p. 307］。

ヒュオン湾　ヒュオン湾 Huon Gulf 一帯の彫刻は鋸歯状や三か月形の幾何学模様のデザインが特徴である。もっとも広く知られているこの地方の芸術は，卵型の木製の鉢である。様式化された人体や鳥が黒色の木にレリーフで彫り込まれ，石灰が埋めこまれて，黒と白のあざやかなコントラストをなす。タミ島Tami Is. のものが特に有名なので，このためこの地域の美術は一般に≪Tami style≫と呼ばれている。彫刻される人体は，三角形の目をし，長方形のかどばった顔からすぐに胴体へとつながり首がないのが特徴で，鳥は羽根を伸ばした姿を真上から見た形に彫刻されている［ギアール，1973: p. 272］ (No. 1272, 1273, 1345)。ヒュオン湾一帯とニューブリテン島南部の地域では，様々な資源を自己充足することができないために，種々の品物の広範な交易がおこなわれている。この交易の具体的な様子は，T. Harding［1967］に詳しいが，この交換のネットワークの中で，木鉢は重要な交易品として大切な位置を占めている。

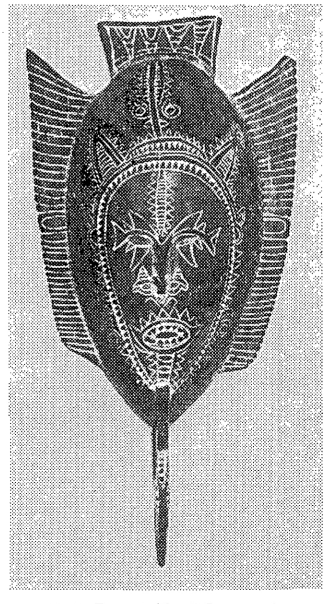


写真5　木鉢 (No.1273)
シアシ地域，マンドック島。長さ53cm。

マッシム　マッシム Massim というのは，ニューギニアの東南端およびその付近のいくつかの諸島の総称である。マリノフスキーの研究で有名になったトロブリアンド島 Trobriand Is. もここに含まれ，マッシムは大規模な交易システムのクラ Kula が行われる地域である。この

地方の社会は，ニューギニアの他の地域に較べてより厳密に規制された階層制度をもつが，男子集会所，イニシエーション儀礼，仮面は存在しない。

ラエの美術商の所で，クラ・カヌーが売りに出ていた。マリノフスキーが「交易遠征隊や訪問団を乗せた原住民のカヌー船団が沖あいに現われ，三角の帆を蝶の羽のようにひろげて海上に散らばり，ホラ貝を合奏して合図をしている光景は忘れがたいものである。やがてカヌーが近づいてくる。真新しい白，赤，黒の塗料に輝いて青い海の上に揺れ，へさきにはみごとなデザインの板飾りをつけ，白い大きなコヤス貝がふれあってからからと音をたてている」［マリノフスキー，1967：p. 173］と述べた，腕輪（ムワリ）と首飾り（ソウラヴァ）を運ぶ遠洋航海用の，あのカヌーである。残念ながらあまりに値段が高くて手が出ず，カヌーのへさきにつける装飾板で我慢しなければならなかった。しかし，この装飾板はマッシム芸術の特徴をよく示している(No. 1255，1256)。

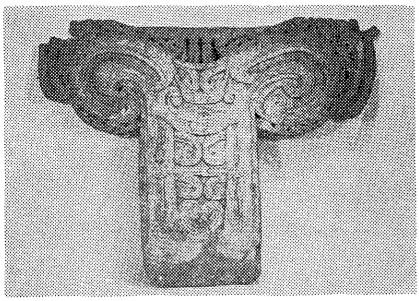


写真6　カヌーの装飾板（No.1255）
トロブリアンド島。横89cm。

装飾板は，二本の縦の帯で囲まれた中央部から螺旋状の模様が左右に飛び出した形になっていて，連続した渦巻模様が太い線で凹刻されている。この抽象的な模様は軍艦鳥をモチーフとし，この鳥の嘴を積み重ねた様を抽象化したものといわれている［CRANSTONE，1961：p. 44；ギアール，1973：p. 315］。この装飾板はカヌーを建造するカヌー大工によって作られ，カヌーに装着される時には呪術儀礼がおこなわれる。

ニューギニア高地　前にも述べたように，今回の収集品の多くは都市の美術商からの購入であったが，畑中氏に連れていただいて，ニューギニア高地のシナシナ地方 Sinasina Sub-district を数日間訪れることができ，そこで若干の日常用品を収集できたのは幸であった。

ニューギニア高地は1930年代に初めて白人と接触するまで，世界の歴史からとり残されてきた地域であったが，戦後，とくに1950年代後半からの社会・文化の変化は著しいものがある。畑中氏は1969年から翌年にかけて，こうした変化のプロセスをシナシナ地方で調査したことがあり［HATANAKA，1972；畑中，1974］，畑中氏にとってひさしぶりの訪問であった。

シナシナ地方では丘陵の尾根に沿って部落がつくられ，村の中心には男子集会所があり，その前は広場になっている。元来は二，三軒からなる部落が点在していたのだが，行政指導により，いまのような集落形態に変ったといわれる。

この地域も，他の高地社会と同様，サツマ芋を主食とし豚を飼育する生活を営んでいる。オセアニア地域で広くおこなわれている料理法としてアース・オーブンは有名だが，この料理法は，ニューギ

ニア高地では丸太を臼状にくりぬいたクッキング・ポット（No. 1367）を用いてもおこなう。底にバナナの葉をひき，熱した石を置く。これにバナナの葉で包んだ豚肉や野菜をのせ，さらにその上にも熱した石を置く。水を注いでしばらくおくと，むし焼きができあがる。

今日のシナシナ地方の人々は，くたびれたものとはいえ，シャツ，ショートパンツ，ワンピースを身につける人が多くなってきたが，伝統的な服装は，男子はちょうど相撲の化粧まわしのような前垂れであり（No. 1401，1402，1407），女子の場合はすだれ状の前垂れを幾重にも重ねたものである（No. 1403—1406）。女子は誰でも，収穫物や身のまわりのもの，時には赤ん坊も，ビルムと呼ばれる編袋（No. 1408，1409）に入れて，それを頭に引っかけて背負っている。

セピック地域と比較すると，ニューギニア高地の美術は彫刻や絵画をそれほど発達させておらず，身体装飾に力点が置かれる。高地人にあっては，身体装飾は単に容姿を端麗に見せるだけではなく，富を示すことでもあり，名声を獲得することでもあった。頭飾りには極楽鳥や火喰鳥などの羽（No. 1398—1400），玉虫をつけたヘッド・バンド（No. 1397），貝製の額飾り（No. 1426—1428）などがある。首飾りとしては，オガンと呼ばれる真珠の母貝を半月型にきったもの（No. 1422—1425），子安貝（No. 1389），豚の牙（No. 1385—1388，1390）などが用いられる。この他にも，腕輪（No. 1394，1395）や足輪（No. 1396）や鼻飾り（No. 1427）で体を飾る。

シナシナ地方の Koge 村に滞在中に近くの Du という村で≪シンシン≫を見る機会があった。≪シンシン≫とは単なる踊りという意味ではなく，ニューギニアの人々の様々な儀礼活動の総称である。この時は，年末におこなわれる予定の豚祭（大量の豚を殺す）に先立っておこなわれたもので，羽毛で頭を飾り，体中に彩色を施して盛装した若者達が，体をゆすり，太鼓（No. 1357）を打ちたたきながら，足で力強く大地を踏みつけ，エネルギッシュに踊っていた。

写真 7　ニューギニア高地，シナシナ地方，Du 村のシンシン。（石毛直道氏撮影）

豚祭には竹製の横笛（No. 1377—1380）が奏される。その音は精霊の声だといわれていて，横笛は神聖なものであり，以前は女性と子供は見ることができなかったという。横笛の二重奏は，単調な音ながらも，荘厳で無気味な響をもっていて，シンシンの踊りの興奮とは対照的であった。

＊　　＊　　＊

この世界は多くの精霊にとり囲まれていると，メラネシアの人々は考えている。祖先の霊はほとんどどこでも崇拝されていて，死者と生者は強い絆で結びついている。食料を供え儀礼をおこなえば，祖先の霊は子孫を助けてくれるけれども，慣習を破ったり儀礼を怠たれば，病気や不幸というむくいをうけるかもしれない［CRANSTONE, 1961：p. 28］。精霊は山や川に，所によっては海にも，あらゆる場所やものの中に棲み，丁重に扱えば人々の生活を守ってくれる。だから，人々はこうした祖先霊や精霊と宥和し，加護を願うことなしには，生活の安寧を期待することはできなかった。メラネシア美術の中心が祖先像や精霊の彫像であるのは，こうした事情に基づいている。

メラネシアの芸術は，変化に富む自在な造形を示し，多彩な展開を遂げている。内容や形式の両面における豊かさは，世界でも他に類を見ないほどのものである。今回の収集旅行でカヴァーできなかった地域，とくに，西ニューギニア（イリアン・ジャヤ），パプア湾地域，ニューアイルランド，ニューブリテン，ソロモン群島などの資料を今後補充することができれば，メラネシア文化の多様性を一層明らかに示すことが可能となるだろう。

文　献

ALLEN, M., 1967, ***Male Cults and Secret Initiations in Melanesia***, Melbourne U.P.

CRANSTONE, B., 1961, ***Melanesia***, The British Museum.

FORGE, A., 1971, Art and Environment in the Sepik in C. JOPLING (ed). ***Art and Aesthtics in Primitive Societies***, pp. 290-314, E.P. Dutton & Co.

GUIART, J. 1968, ***Oceanic Art***, Fontana UNESCO Art Book.

ギアール（岩崎力訳），1973，『南太平洋美術』新潮社。

HARDING, T., 1967, ***Voyagers of the Vitias Straight***, Univ. of Washington Press.

HATANAKA, S., 1972, ***Leadership and Socio-Economic Change in Sinasina*** (New Guinea Research Bulletin No.45), The Australian National Univ.

畑中幸子，1974，『われらチンブー』三笠書房。

マリノフスキー（寺田，増田訳），1967，『西太平洋の遠洋航海者』『世界の名著59』中央公論社。

NEWTON, D., 1972, *Art* in ***Encyclopaedia of Papua and New Guinea***, pp. 29-50, Melbourne U.P.

STEWART, G. (ed.), 1972, ***Sepik Art***, Garrick Publishers.